

101. ロジャーと洞穴

ロジャーは、小さかったのです

他のどの男たちよりも

彼のクラスの。

時々、

男の子たちは、言いました、

「小さいよね、

ロジャーは、」

「一緒には遊べないよ

だって、ケガしそうだもの。」

ロジャーは、好きではありませんでした

小さいことが

他の子どもたちよりも。

彼は、思っていました

彼は、決して出来ないだろう

友達が



なぜなら、彼は他の子どもたちとは違うから。

ある日、

ロジャーのクラスは、

遠足がありました

山や行く。

ロジャーは、ハイキングが好きでした、

でも、彼の短い足では

遅れてしまいます

彼のクラスメイトよりも。

他の男の子たちは、

とても早く歩いたので

ロジャーは、遅れていました

彼らの後ろに。

森は、霧で覆われていました

その日、

1人の大きな男の子が転んでしまいました

なぜなら、見えなかったので

進行方向が。

ドカーン！

彼が、地面にぶつかった時に、

彼は、リュックサックを落としました。

リュックサックは、転がって行きました 小さい、

暗いほら穴に。

ロジャーが、やっと追いついた時

みんなのグループに、

みんなは、試みていました

リュックサックを取り出そうと

ほら穴から。

ロジャーは、分かりました

ロジャーなら入って行けると

ほら穴の中に。

彼は、すり抜けて

男の子たちのグループを、

ほら穴に入りました、

その後

シーンとしていました。

誰も見えませんでしたし

聞こえませんでした、ロジャーを。

しばらくひっそりとした後

リュックサックが、飛び出してきました

ほら穴から

地面の上に。

そして、ロジャーが出てきました

暗いほら穴から。



「ロジャーは、すごいぞ」

1人の男の子が、言いました。

その日から、

ロジャーは、いつも友達がいました。



102. 甘やかすこと、厳しくすること

ヘザーとジョディは

兄弟でした。

彼らは両親と暮らしていました

小さな家に

とある町に

クィーンストンという。

ある年

ヘザーは、ジョディとお父さんと一緒に

犬を買いました

English Education Laboratory
家族に。

それはゴールデンラフドルで

美しい犬でした。

ヘザーとジョディは



犬の名前をサシャに合意し

すぐに

その犬はなりました

家族の一員に。

「チーズを一切れ欲しいかい？」

ジョディは聞きました

ささやき声で。

サシャの耳はピンと立ちました。

サシャは眠っていました

台所の側で

ジョディがその言葉を言うまでは

「チーズ」と。

ジョディは薄く切り

厚いモッツァレラチーズを

そしてポイッと投げました

犬の方に 。



サッシャはそれを捕えました

あごから飛びついて

そしてしきりに待ちました

もう少し（のチーズ）を。

ジョディは一かけ切りました

自分のために

そして

もう一かけをサシャのために。

それからジョディは戻りました

自分の部屋に

English Education Laboratory

「チーズを一切れ欲しい？」

ヘザーは聞きました

ささやき声で。

彼女はちょうど終えたところでした



本を読むのを

彼女の友達が貸してくれた

そして今

冷蔵庫を探っていました

スナックはないかと。

彼女が見つけた時

棒状のチェダーチーズを

包みを取って

6切れに切り取りました。

ヘザーは2切れを食べ

残りの4切れを投げました

English Education Laboratory
1切れずつ、

サッシャに向かって。

サッシャは喜んで捕えました

4切れすべてを

口で。



それからヘザーは眠りにつきました。

サッシャはとてもいい犬でした。

サッシャはとてもえらかったので

ご褒美をもらえました

数回

一日に

何片かのチーズの

— （それは）サッシャの大好物。

—

サッシャはとてもよく言うことを聞いたので

English Education Laboratory
とても太ってしまいました

チーズのご褒美で。

獣医は

不満でした

サッシャに

まったくもって。

「君たちは自覚しないといけないよ

この犬は健康じゃない。」

医師は言いました。

「彼女にさせないといけない

食事療法を

そうでないと彼女は生きることになる

とても短い命を。

覚えておきなさい、

たとえ

English Education Laboratory
サッシャが君たちに懐いても

スナックをあげた時に、

君たちがサッシャを好きなら、

君たちは彼女を助けるんだ

また健康になるように。」

子供たちは

医師にうなずきました。

そして

サッシャを連れて帰りました。

ジョディとヘザーは

心配しました

サッシャに何が起こるだろうかと

彼女がさらに太ってしまったら。

彼らは恐れていました

医師が言ったことを。

English Education Laboratory

家についた後、

2人はすぐに決めました

サッシャを連れて行くと

長い散歩に

ハイキングできる丘へ



家の近くの。

彼らはこれを決まっていきました

数ヶ月の間

彼らの訪問の後

獣医への。

そして徐々にサッシャはなってきました

再び細く、健康に。

サッシャは恋しかった

毎日のチーズが

そしてしばしば待っていました

English Education Laboratory
台所のドアの側で

ご褒美を。

しかし、しばらくして

気づいたのです

もうスナックはないと。

しかしそれは大した事ではありませんでした。

サッシャにとって。

彼女は長い散歩が好きで

過ごしていました

家族と一緒に。

それが彼女にとって一番の幸せでした。



103. 欲望の恐さと奉仕する価値

リサは買い物に行くと

お母さんといっしょに

決まって聞こえてきました

同じ表現が・・・

「金のなる木なんてないのよ」

リサは

11歳の女の子でした

欲しがりの

新しい靴

セーター

コンピューター

リュックサック

スカート

その他、何百ものモノ

大切な

11歳の女の子たちにとって。



「どうしてなの、ママ？」

と尋ねたものでした。

「どうして私はこのCDを手に入れられないの？」

するとお母さんはそのたびに

頭を横に振って

言ったものです。

「なぜなら金になる木なんて無いからよ」

ある日

早春の

English Education Laboratory
リサは大きな木の側を通りかかりました

飼い犬といっしょに。

リサは止まりました

見上げるために

そして言いました

「金のなる木なら良いのに」

するとその時

すべての葉っぱが大きくなって

葉の形が

長方形になったのです。

すべての葉っぱが

紙幣になりました。

欲しがりました

すべてのお金を

自分のために。

English Education Laboratory

さあ

2つのバッグを持ってきました

自分で

そして決心しました



木に登ることを

そしてお金を引きちぎろうと

木の枝から。

そしてそうしました。

木は裸に見えました

まるで

真冬であるかのように。

その暗く

丸裸になった枝は

悲しそうでした

English Education Laboratory
比べると

青々と茂った枝とは

他の木々の

その草原にある。

リサは家に帰りました



バッグと共に

買い物を夢見ていました

欲しいものすべて。

でも

彼女のワクワクは

長くは続きませんでした。

その次の日

リサは開けました

バッグの一つを

そして気づきました

お金が

腐り始めていることを。

それは草に臭いがしました

堆肥の中にある。

— お金は枯れかかっていたました。



何もありませんでした

リサにできることは

彼女のお金を救うために。

彼女は処分しました

腐りかけているお金を

ある朝

そして木のもとへ再び行きました

彼女がお金を見つけた。

木は弱っているようでした

何もなくて

枝に。

「私のせいだわ

あなたがこんな風に見えるのは」

彼女は言いました

それから

「約束する



これからずっと

あなたの世話をするって」

これが最初の日でした

リサが今までになく

真剣に考えた

欲望の恐さと

奉仕することの価値を。



104. 屋根裏部屋の物音

屋根裏部屋は面白い場所です。

その用途はたいてい

家具を補完すること

そして他のもの

ほとんど二度と使わない。

古本

時代遅れのランプ

大きな額に入った絵画

ボードゲーム・・・。

このようなものが

English Education Laboratory
見つかります

たくさんの家庭の屋根裏部屋で。

なぜなら

たくさんの古くて使われないものが

屋根裏部屋にあるからで

そこは好かれている場所でもなければ

毎日行くような墓所でもありません。

マツトは行ったことがありました

家の屋根裏部屋に2回だけ。

2回とも

そこは埃だらけて暗くて

そして少し不気味だと感じました。

ある日

彼は歩いていました

屋根裏部屋のドアの側を

English Education Laboratory
彼が聞いたとき

引っかく音を。

その引っかく音は、ゆっくりで

それは指の爪のように聞こえました

黒板を引っかいている。

マットは息をひそめました

そして怖くなりました。

「お父さん！お父さん！」

彼は叫びました

下の階の書斎に向かって走りながら。

「僕なんかへんな音を聞いたんだ
屋根裏部屋で！」

「おー、マット

気をつけろ

English Education Laboratory
お化けかもしれないよ

お前を食べに来たのかも」

お父さんは笑いました

マットをからかいながら。

お父さんが彼を信じなかったので

マットは少し腹が立ちました

そして彼の屋根裏部屋への恐れは

願望に変わりました

説明したいという

屋根裏部屋の音は本当だったという事を。

彼はドアに向かって上がっていきました。

彼はドアを開けました。

彼には例の引っかいている音が聞こえました

今は前よりも大きく。

「何だろう？」

彼は不思議に思いました。

「幽霊？吸血鬼？お化け？！」



ちょうどその時

マットが一步足を踏み入れた

屋根裏部屋の中へ

ある生き物が走りました

彼の足の間を

そして階段を下りていきました

そこでは

お父さんが読書をしながら

パオプをふかしていました。

数秒後

マットがドキドキしていると

彼は、お父さんが叫ぶのを聞きました

「アライグマだ！」

何度も何度も。

マットは笑いました

聞いたとき

信じていなかったお父さんが叫んでいるのを。

マツトは気分が良くなりました

お父さんに証明できたので

屋根裏部屋の音は

ただ単に、なかったことを

彼の妄想では。

すぐに彼は下に降りていき

網戸を開けて

そして

その動物を外に出しました。



105. 恋の痛み

「もう一回！」

「もう一回！」

「もう一回！」

ナイジェルは思いました。

「もう一回！」

彼は自分に言い聞かせました

バーベルを持ち上げながら

上下に

胸の上で。

「もう一回！」

English Education Laboratory

ナイジェルは運動をしていませんでした

2年以上の間。

パーティーで

前の週の、

ナイジェルはかわいい女の子に会っていました

ベヴァリーという名の。

彼女は示していました

ナイジェルにいくらかの興味を

彼を招待することで

バーベキューパーティーに

彼女が主催する

その次の週末に。

その日は

ナイジェルがスポーツクラブに入会した

木曜日でした。

English Education Laboratory

パーティーは

土曜日です。

強く願いながら

美しいベヴァリーの心をつかむことを、

彼は決心しました

筋肉を鍛えようと

そして体を鍛えようと。

彼には2日ありました

鍛えるために。

「もう一回!!!」

彼は自分に言い聞かせました

バーベルが彼の上で揺れているあいだ。

ナイジェルは汗を流していました

3時間半のあいだ。

English Education Laboratory

彼は使っていました

エアロバイクと

ローイングマシンを。

彼は腹筋運動と、

腕立て伏せと、

懸垂をし、

持ち上げていました

いろんなサイズのバーベルを

いろんな方法で。

そして5時間のトレーニングを終えると、

ナイジェルはタオルを持ち上げるのがやっとでした

シャワーの後に。

次の朝

ナイジェルはあることを体験しました

まったく経験したことのない

English Education Laboratory
以前に。

彼の体はなっていました

板のように硬く

彼のすべての筋肉は

痛んでいました

今までにないほど。

ナイジェルは目を覚ましたとき

動くことができませんでした。

たとえ

筋力があっても

ベッドから出る

それをするのは痛すぎたでしょう

彼には。

ナイジェルはベッドに寝ていました

数時間

その日

English Education Laboratory
空腹のためにどうしてもさせられるまで

起き上がることを。

彼はゆっくりと歩きました

台所まで。



りんごを1つ手にして

かじり始めました。

筋肉さえもが

彼のあごの周りの

痛みました。

ひどい一日でした

ナイジェルにとって。

その翌日

— ベヴァリーのパーティーの日 —

ナイジェルの調子はなっていました

少しだけ良く。

English Education Laboratory

彼は歩くことができました、

ゆっくりとだけでしたが。

そして彼の両腕は下がっていました

彼の両脇に奇妙に。



彼はほとんど腰に手も当てられない状態で

両腕は下がっていました

斜めに、

(両腕)あわせて

形に

“ V 字 ” を逆さまにした。

ナイジェルは着きました

パーティーに

6 時半ごろ。

English Education Laboratory
彼にはかかりました

数分

車から降りるのに

なぜなら

体中が痛かったのだ。

ベヴァリーが彼を見かけたとき

彼女は戸惑ったように彼を見ました。

「ナイジェル

大丈夫？」

彼女はナイジェルに聞きました

少し気遣ったような

声で。

ナイジェルの顔はとても真剣そうでした。

彼がベヴァリーに説明した後

入会したことを

English Education Laboratory
スポーツクラブに

その週、

彼は頭を下げました。

一瞬の沈黙があり

ベヴァリーは笑い出しました。



ナイジェルは彼女を見上げました

最初はためらいました

突然の大笑いに

そしてそれにホッとしました。

ベヴァリーが言った時、

「あなたってとてもかわいいわ」と

ナイジェルに、

彼は顔に満面の笑みを浮かべました。

その夜の残りの時間

ナイジェルは感じました

English Education Laboratory
よっぽど居心地よく。

彼の最初の試みは

ベヴァリーの心をつかむという

失敗しました、

しかし失敗して、

ベヴァリーは好感を持ち始めていました

彼に。

おそらく彼女には分かっていたのです

ナイジェルはやったと

いろんなトレーニングを

彼女のことを好きだったのだ。

おそらく彼女は彼のことを気に入っていました

そのおかしい状態のせいで

両腕が突き出ている

彼の両脇から。

English Education Laboratory
どんな理由であっても

彼女の関心をひいたのが

ナイジェルへの

彼にはほとんど問題ではありませんでした

彼が輝きを見つけたとき

彼女の瞳に。

彼はベヴァリーを誘いました

ディナーに

彼との

次の週に。

結局、

彼の番になりました

彼女をどこかへ招待する。

そして彼女は招待を受けました

首を傾けて

少し微笑んで。

English Education Laboratory



106. ある不思議な朝

ある朝、目が覚めて

気づいた

自分が小さくなっていたことに

夜の間。

ある日

私はなっていた

りんごほどの身長

ねぎほどの幅

そして体重は

中ぐらいのにんじんほどに。

English Education Laboratory
私はとても小さかった！

シーツがありました

私のからだの上に

なぜなら私は近くにいたので

ベッドの中心の

そのシートがすっぽり自分をおおっていた。

私は歩かなければならかった

端まで

ベッドの

新鮮な空気と

光を求めて。

そしてそれはたやすくはなかった。

マットレスは柔らかく

私は二回も落ちた

枕は

English Education Laboratory
巨大なマシュマロのよう

そしてそれによじ登ることは

極めて困難だった。

到達したとき

ベッドの端に

私は見回した

自分の広大な部屋を。

家具の全ては

かなり大きくなっていた

私の小さな目には。

ベッドの足を滑りおりて

それからはじめた

カーペットを端から端まで歩くことを。

まるで背の高い草が

自分の足にからみついてくるように感じた。

「自分に何が起こったのだろうか？」

私は考え込んだ

眺めながら

落ちている髪を



その髪はまるで

馬用のむちほど太く見えました。

「また大きくならなくては！

生きていけない

こんな姿では」

私は次第に

パニックになりはじめた。

私の心臓はバクバクしはじめ

いっそう早く

English Education Laboratory
巨大なゴキブリが

私のナッフサックの脇をすばやく通り過ぎたとき

冷蔵庫に向かって。

私は隠れた

肩掛けの後ろに



ナッフサックの

そして待った

ゴキフリがいなくなるのを。

見えなくなったとき

巨大なゴキフリが

私はキッチンに入った。

テーブルはとても背が高く

そして私はその下に立っていた。

一片のパンくずがあった

私のそばに。

それはとても大きかった。

まるで

引きちぎられた

フランスパンのように見えた。



私はその上に座った

枕のように

そして思い始めた

起こったことについて

自分に。

時々、人はいう

「辛かった

今朝、起きるのが」

だけどその日の朝は

表現されがたい

English Education Laboratory
この文では。

全てが巨大なんて

すごく変だ！

それから私は聞いた



ビーッ、ビーッという音を

ビーッ！

ビーッ！

ビーッ！

その音は鳴り続けた。

それは次第に大きくなった。

ついに私は目が覚めた。

またベッドに戻っていた！

いつものサイズだった。

私は微笑んだ

私が思い出したとき

自分の夢を。

English Education Laboratory

それから起きて

朝食を作った。



107. オランウータンのミーナ

僕はジャングルにいた

2日間。

僕らのリーダーは

小さな町からやってきた

インドネシアのスマトラにある。

それは同じ小さな町だった

僕らが泊まった

3日前に。

彼は僕らを案内していた

—2人のドイツ人、

2人のスウェーデン人、

1人のスロベニア人、そして、僕

— 熱帯雨林を。

僕らは彼を雇った

連れていってもらおうと



この旅行に

見たかったので

野生動物を、

特に

野生のオランウータンを。

2 時 30 分

午後

僕らのガイドのトーマスは

たたき切っていた

つるや枝を

なたで。

彼は音を聞いたのだ

木々の中での

そして今

僕らをそれに向かって案内している。

彼は止まって、



振り向いて

彼の指を当てた

自分の口に。

「しー…」

彼はささやいた

僕らはみんな止まって

静かにした。

彼は指差した

木の枝を

そして僕らはみんな見たんだ

驚きながら、

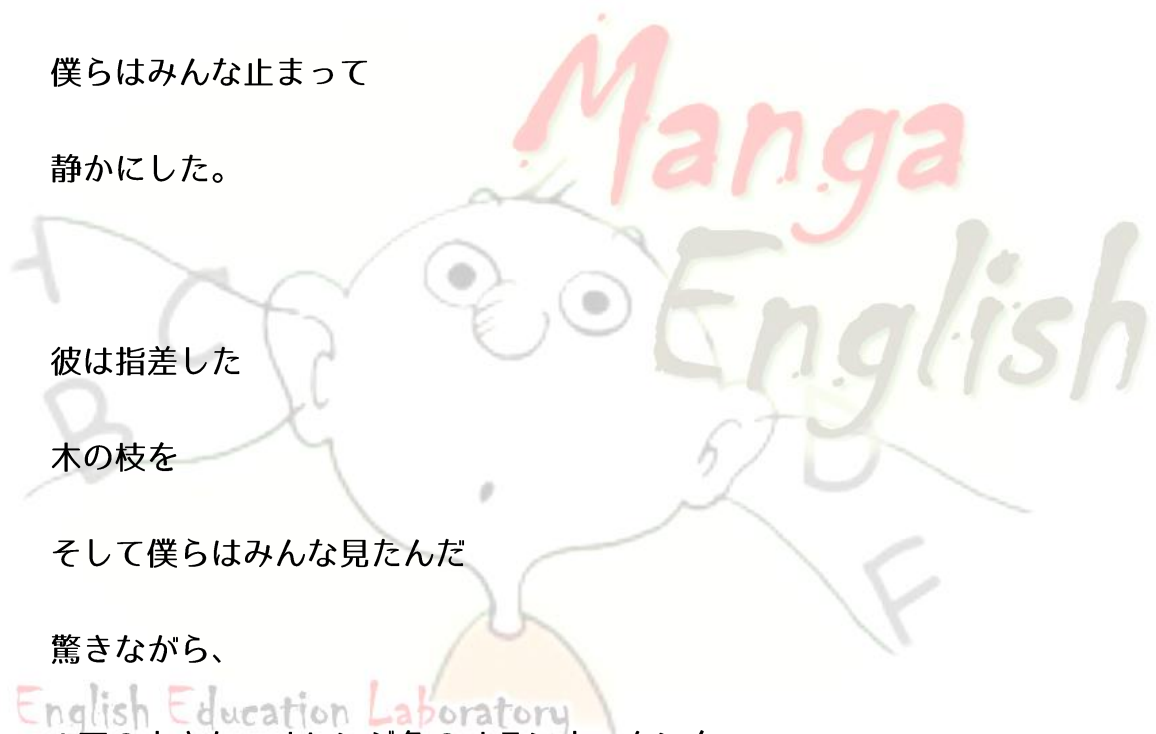
English Education Laboratory
4匹の大きな、オレンジ色のオランウータンを。

オランウータンは食べていた

何かのフルーツを

そして、種を吐き出していた

地面に



僕らの周りの。

僕らはそこにいた

しばらくの間

見上げながら

大きな、毛でふさふさした生き物を。

それから

僕らは戻ろうと歩き出した

道の方へ。

そのとき

トーマスがまた立ち止まったんだ

English Education Laboratory
そして今度は

みんなに聞こえた

何かが動いているのが

木々の中で

僕らの上の。



トーマスは僕らに注意していた

前の夜、

ミーナについて。

彼女は「大きくて怒っているオランウータン」だと。

トーマスは僕らに教えてくれていた。

「もしミーナを見たら、

一逃げるんだ。」

彼は冗談を言っていたのだろうか。

僕らはみんな不思議に思った。

それとも、彼はまじめに言っていたのだろうか。

ミーナが来たとき

木を一気に駆け下りて

その午後



僕らはみんな分かった

トーマスはまじめに言っていたのだと。

「逃げろ！」

彼は叫んだ。

そして僕らは逃げた。

でもトーマスは残った

木のふもとに

僕らを守るために。

僕ら6人は

走りに走った。

僕はひどく息切れしたので

その時には

道にたどり着いた

寝そべってしまった

地面に

激痛のために



わき腹の。

他のみんなもすぐに

横になったり

座り込んだり、

僕の周りで立ちすくんだりしていた。

みんな怖がっていたし、

不安そうだった。

「どうしたらいいんだ。」

ドイツ人が言った。

「トーマスは、どこだ？」

English Education Laboratory

トーマスがついに現れたとき

森の中から

ひどく疲れていたようだった、

そして、彼は持っていた

空っぽの茶色い袋を。



そしてやっと彼が話したとき

彼は、言ったんだ:

「ミーナは

単なる怒ったオランウータンじゃない

ーミーナは

ひどく腹ペコのオランウータンでもあるんだ。」

彼は微笑んで、

首を横に振った

「僕らは大丈夫だ、」

彼は言った、

「でも、パッションフルーツはなしだね

今夜の夕食に。」

彼は振った

空っぽのフルーツ用の袋を

手で

そして笑い出したのだった。

108. マシュマロとホタル

暑い夏の夜でした。

サンディと彼女の友人たちは

キャンプファイアーの周りに座っていました。

サンディは、大きな瓶を持っていた

マシュマロの。

彼女達は、マシュマロをつけた

棒に

そして、それらを焼きました

火の上で。

それから

彼女達は、それらを食べました。

サンディは、たくさんのマシュマロを食べました。

グリーンのマシュマロ。



ピンクのマシュマロ。

ブルーのマシュマロ。

間もなく

もうそれ以上マシュマロはなくなりました

そして、その瓶は、空っぽになりました。

サンディの友人は、置きました

彼女のマシュマロの棒を

そして、近くの木々を見ました。

「見て」彼女は、言いました。

English Education Laboratory
みんなは、見ました。

枝や葉っぱの間に、

小さな小さな光が輝いていました。

中には光が輝いて

しばらくの間

それから止まるものもありました。

また他には、自分でするものもありました

ついたり消えたり。

中には動くものもありました

1つの枝から他の枝に。

「何が起こっているの
あれらの木の中で？」

サンディは、尋ねました。

English Education Laboratory
彼女は、とても驚きました

なぜなら、彼女は、一度も見たことがなかったのです

そのような光を、以前に。

「あれらはホタル」

彼女の友人が、彼女に言いました。

「ときどき

あれらは、夜に光るの

できるように

それらが、その友達を見つけることが」

サンディは、とてもわくわくしました

そして、彼女は、立ち上がりました

空のマシュマロの瓶を持って。

サンディは、言いました、

「私、ホタルを捕まえる」

それから

彼女は、近くへ歩きました

木々の。

間もなく

1つの小さな光が、輝いていました

彼女の大きなガラスの瓶の中で。



サンディは、とても幸せな状態で家に帰りました

その夜。

その次の日、

サンディのホタルは、眠っていました

瓶の中で

テーブルの上の。

彼女は、その瓶を見ました

それから

公園へ行きました

彼女の友人たちと一緒に。

English Education Laboratory
彼女は、一度も考えませんでした

彼女の新しいペットについて

一日中。

サンディが、家に帰ったとき

太陽は、すでに沈んでいました。

彼女は、思いました

彼女のホタルは、輝いているだろうと

暗闇の中で、

でも、彼女が見たとき

瓶の中を

それはじっとしていて暗い状態でした。

そのホタルは、這っていました

とてもゆっくりと

ガラスに沿って。

光は、ありませんでした

その体には。

それは孤独で悲しそうに見えました

瓶の中で

そして、このことがサンディを悲しくさせました。

間もなく

サンディは、「さよなら」を言っていました

そのホテルに。

彼女は、瓶を開け

そして、それを置きました

木々の近くに。

その夜

輝いている光は、1つもありませんでした

枝々で。

サンディは、願いました

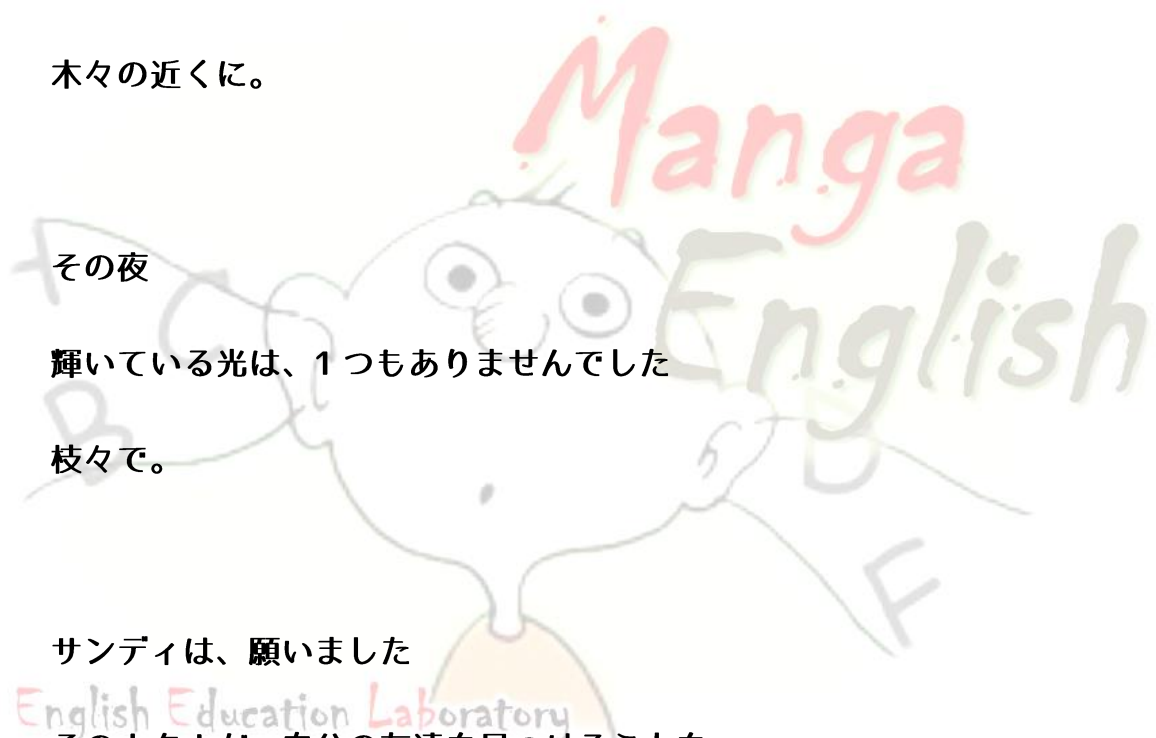
そのホテルが、自分の友達を見つけることを。

サンディは、うれしく感じました

そのホテルがついに

這うことができ

瓶の外に



そして、飛べたとき。

彼女は、瓶を閉じました

そして、家に帰りました。

サンディが、見た最後のものは

彼女が、眠りにつく前に

とても美しかったです。

彼女の寝室の窓の外に

千もの輝く光が、ありました

彼女にキラキラときらめいている。

English Education Laboratory

Manga
English

109 シーラの新しいファッション

シーラは、不満でした。

彼女は、感じていました

彼女の生活は、退屈になってきていたと

そして、彼女は、変えたいと思っていました

彼女の感じ方を。

毎日、仕事の後

シーラは、決まって家に帰りました

彼女の孤独なアパートへ

そして、テレビを見ました。

週末には

シーラは、いつも家に居ました。

「どうやったら私は、出来るのかな

私の生活をもっとおもしろく？」

シーラは、自分に問いかけたものでした

毎夜。



そして、ある晴れた土曜日の朝

シーラは、テレビを消し

そして、ソファーから飛び上がりました。

「私は、買う

すべて新しいお洋服と靴を、

そして

私は、する

新しいヘアスタイルに」

その日の残り

シーラは、買いに買いました

彼女の腕がいっぱいになるまで

デパートの袋で。

それから

彼女は、美容院に行きました。

その日の終わり

シーラは、とても疲れていました、



でも、とても幸福でもありました

彼女の新しいファッションで

そして、全ての楽しみのために

彼女が、感じた

その日。

次の朝

シーラは、試してみました

すべての彼女の新しい洋服を。

でも、

午後の中頃までには

シーラは、イスに座っていました

English Education Laboratory
彼女のリビングの

そして、テレビを見ていました

また。

「私は、どうしたんだろう？」

彼女は、自分に問いかけました。

「私は、あんなに楽しい日を過ごしたのに

昨日、

でも、全ての私の新しいファッション

と、このヘアスタイルは

私を全然変えてくれてないじゃない！」

長い時間は、かかりませんでした

シーラが

認識するのに

彼女が、そんなに楽しかった理由を

土曜日に

English Education Laboratory
それは、なぜかというと

彼女は、家の外にいて

そして、何かをしていたからでした。

彼女は、家に居なかったし、

孤独でも退屈でもありませんでした。

シーラは、決心しました

その日の午後。

彼女は、決心しました

何かクラブに入り

そして、何か趣味を見つけることを。

数週間後

シーラの生活は、なっていました

満たされて、わくわくするものに。



110. かご一杯の果物

また夏のことでした。

暑くて、めじめでした、どこもかしこも

いろいろな虫がざわついていました

木の中で。

コリンは玄関に座って

家の

聞いていました

夏の音を。

English Education Laboratory
夜でしたが

蚊は

周りにいませんでした

コリンはとても落ち着いていました。

月を見て



7月について考えました。

7月はおかしな月です

コリンと家にとって。

毎年7月23日には

コリンはある物を見つけます

玄関のドアの横に。

起きて

朝

朝食を作って

外へ行って

English Education Laboratory
新聞をとります。

毎年

新鮮な果物の入ったバスケットが

待っています

外で。



りんごとなしは輝いています

バスケットの中で。

その間には

どっしりとしたスラムと桃があります。

ダークチェリーと大きなブルーベリーは

散らばっていました

他の果物の上に。

一房の葡萄は

いつも一番上にありました。

English Education Laboratory

毎年コリンは思いました

バスケットと果物は

すごく美しく見える。

さらに思っていました

バスケットの中にある果物が
一番おいしい果物だと
世界中で。

でも誰が果物をくれるのだろう
僕に毎年 7 月 23 日に。

コリンは独り言を言いました。

そしてどうして？

コリンはポーチに座りながら

月を見て

English Education Laboratory
計画を作りました。

コリンはわかっていました

その日は 7 月 22 日だから

その次の日に

フルーツが彼を待っていると。



彼は待つ決心をしました

ポーチで一日中

謎の人物が来るのを。

次の日コリンは起きました

とても早くそして外で待ちました。

バスケットはまだありませんでした。

コリンは座りました

新聞を持って、そして待ち始めました。

English Education Laboratory
その日はとても長い一日になりました。

彼はしょっちゅう見上げたり見下ろしたり

通りを誰かが持ってくるのを

フルーツバスケットを、でも

誰も見ませんでした。

すぐにまた夜になり

そしてまだ

コリンのフルーツバスケットはありませんでした。

コリンはとても戸惑いながら

その日の晩はベッドに入りました。

毎年バスケットは

届いていたのに、でもその年は

何もありませんでした。

コリンは二度と待ちませんでした

English Education Laboratory
ポーチで

フルーツが届くのを。

仕事に行ったり

家の中で本を読んだりして

考えないようにしました

その不思議なフルーツバスケットのことは。

ヒミツは

ヒミツのままにしておくことなんだ

コリンは思いました。

フルーツバスケットはありました

コリンのポーチに

次の年も

そして毎年ずっと。

